

女子学生の進路選択に関する考察

中村 三緒子

Female Students' Career Choices

Mioko NAKAMURA

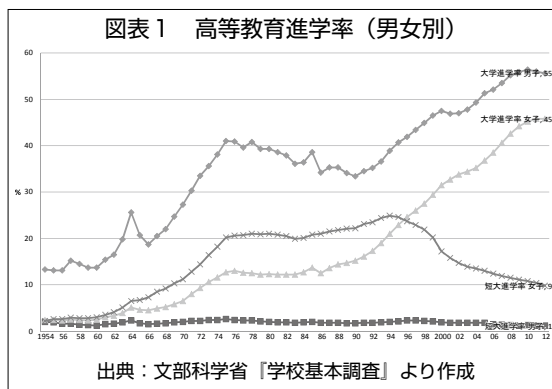
1. 課題設定と先行研究の検討

高校卒業後の進学率は戦後増加してきた。特に女子の進学率は目覚ましく、短期大学(以下、短大)は女子に特徴的な短期高等教育機関として大きな役割を果たしてきた(小方 1994)。1975年まで女子の短大進学率は上昇した後に停滞し、1994年をピークに減少に転ずるまでの間、女子の高等教育進学者の半数以上が短大にすすんでいた。1990年代後半以降女子の4年制大学(以下、大学)への進学率が短大進学率を上回り、女子の高等教育は短大そして大学と量的拡大してきた(図表1)。

1960年代から70年代の女子の高等教育の量的拡大⁽¹⁾は、家政学部、女子短大、女子大学への集中といった特定の大学・学部によってもたらされた。家政学部、女子短大、女子大学などの「女性専用軌道」の学生の増加によって女子高等教育が拡大したことは、男子とは異なる領域での拡大であり、配分される「知識」は女性の性役割に適合的であった。男子にとって学歴は「地位形成」の機能をもつものであったが、女子が獲得する学歴

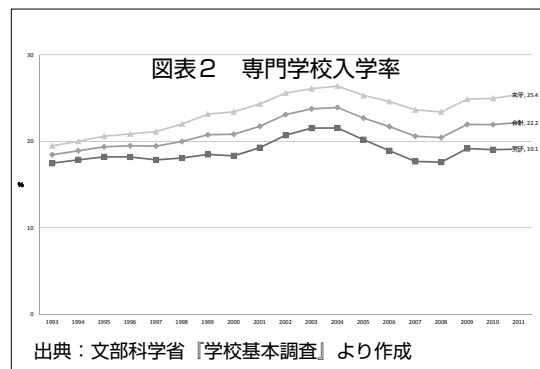
は、男子とは異なる社会的機能をもつこととなった。この時期女子の高等教育の拡大は、特定階層の男性の妻となり母となるための教養教育か、女性の表出的役割と関連した少数の職種に就くための教育に限定された「地位表示」機能でしかなかった(天野 1986, 河野 2009)。女子生徒は、属する学校タイプの如何にかかわらず、高校入学後の早い段階から志望のレベルを低く設定している(天野 1988)。女子が将来の進路を選択する過程に業績本意で選抜される男子とは異なる世界があると指摘されていた(白川 2011)。

1990年代以降女子の大学進学率が上昇⁽²⁾するにつれて、進路選択を支える基盤構造に男女の共通性が高まる現象がみられるようになった。かつて女子は女子であるがゆえにいわゆる「女子向き」進路をとる傾向が強く、成績が関与する余地が男子に比べて小さかったが、大学への進学者が増大するにつれて男子と同じ構造に向かってきた。男女の共通性の増大は、男子の進学に強く作用していた「成績原理」が女子にも浸透していく過程にみられるという⁽³⁾(尾嶋



2002, 片瀬 2005)。1995年SSM調査データを分析した尾嶋によると女子の短大への進学者の減少が大学への進学者の増加以上に大きく、そのことが進学率低下の原因となっている。短大自体の魅力が低下したことが原因かもしれないが、相対的にコストの低い高等教育機関である短大への進学率の大幅な低下には経済要因が関わっている可能性を指摘した。男子では自分の成績から進学をあきらめる者が多いのに対して、女子では家庭の経済状況から進学を断念する者が増えている。特に女子には家庭の経済状況の影響を増大させ、教育アスピレーションを冷却する働きをしている(尾嶋 2002, 片瀬 2005)。大学への入学が容易になった結果、学業成績は従来考えられてきたほどの機能を果たしているわけではない。大学に進学するか否かの振り分けの指標は、学業成績以上に家庭の経済力によって決定づけられているという(安田 2002)。

一方、女子の高校卒業後の進路として専門学校⁽⁴⁾の存在も注目されている。1990年代には短大進学率が専門学校進学率を上回っていたが、2000年以降は逆転し、専門学校進学率が短大進学率を上回っている(図表2)。専門学校は不況や資格人気を背景に多くの入学者を集めるようになり、制度的に短大に近い処遇になっている⁽⁵⁾。短大も専門学校も教育年数は基本的には2年間という点も同じであるが、カリキュラムに違いがある(長尾 2005)。高校生を対象にした調査結果から専門学校への進学を希望する女子高生は「手に職」としての仕事志向が短大進学希望者よりも強く、結婚や出産を経ても働き続けたいと考える傾向がある。就職や仕事に意識が向いている者は専門学校への進学を希望しやすい。この傾向は将来仕事をどれだけライフコースの中心に据えるかということや働き方の希望にも反映される。専門学校進学希望者には仕事志向が強く独立起業を望む者が多く、短大進学希望者には正社員や専業主婦を望む者が多くなるという。キャリア形成についての展望には違いがあるものの結婚や第一子出産の希望年齢には有意な差は見られない(長尾 2005)。高校生を対象としたパネル調査結果⁽⁶⁾から高校生が目指す資格の種類は専門学校・短大それぞれ専門領域と関連し、より特殊性が高い資格の高い場合は専門学校、汎用性の高い資格や履修によって取得できるタイプの場合は短大に進学する⁽⁷⁾(長尾 2007)。



は将来仕事をどれだけライフコースの中心に据えるかということや働き方の希望にも反映される。専門学校進学希望者には仕事志向が強く独立起業を望む者が多く、短大進学希望者には正社員や専業主婦を望む者が多くなるという。キャリア形成についての展望には違いがあるものの結婚や第一子出産の希望年齢には有意な差は見られない(長尾 2005)。高校生を対象としたパネル調査結果⁽⁶⁾から高校生が目指す資格の種類は専門学校・短大それぞれ専門領域と関連し、より特殊性が高い資格の高い場合は専門学校、汎用性の高い資格や履修によって取得できるタイプの場合は短大に進学する⁽⁷⁾(長尾 2007)。

先行研究で女子高校生の進路選択希望から女子高校生の職業意識や進路の変化が議論されてきた。女子高校生は男子と同様の進路志向があることや資格志向が指摘されてきたものの、女子高校生の進学後の職業意識・将来展望、資格取得を目指す女子学生の進路選択と将来展望については議論されてきたとはいいがたい。本研究では、資格取得を目指す女子学生の進路選択と将来展望との関係をより詳細に明らかにすることを試みる。

2. 使用データと対象者の属性

2.1 調査の対象

中京圏のA女子大学短期大学部保育学科の1・2年生を対象に2013年7月～8月に調査を行った⁽⁸⁾。

2.2 対象者の属性

1) 両親の職業

対象者の父親の約9割は正規職員であり、母親の半数はパートなどの臨時職員であり、26%は正規職員である(図表3)。両親の仕事について、父親は専門・技術的職業と営業・販売・サービス業が3割であった。母親の職業は事務が最も多く、次いで営業・販売サービス職、教師・保育士・看護師であった(図表4)。従業員規模は両親ともに1~29人が最も多く、次いで30~99人の職場である(図表5)。

図表3 両親の仕事形態 単位：%

	父親(N=248)	母親(N=255)
正社員・正職員	89.5	25.5
パート・アルバイト・ 臨時・契約	1.6	56.5
派遣社員	-	3.5
無業(専業主婦含)	-	11.4
その他	8.9	3.1

図表4 両親の仕事 単位：%

	父親(N=239)	母親(N=246)
教師・保育士・看護師	5.0	21.5
専門・技術的職業	30.1	8.5
管理的職業	5.0	2.0
事務職	7.9	25.6
営業・販売・サービス職	30.1	24.0
生産現場職	12.6	4.1
その他	9.2	6.9
無業(専業主婦含)	-	7.3

図表5 両親の従業員規模 単位：%

	父親(N=193)	母親(N=199)
1~29人	33.7	51.3
30~99人	29.0	26.1
100~499人	9.3	7.0
500~999人	9.3	4.0
1000人以上	17.6	5.0
官公庁	1.0	0.5
無職	-	6.0

図表6 現在と高校3年時の暮らし向き 単位：%

	現在(N=225)	高3時(N=275)
豊か	14.2	16.7
やや豊か	12.9	11.6
ふつう	57.3	55.6
やや貧しい	9.8	10.5
貧しい	4.9	4.0
わからない	0.9	1.5

2) 進学前の暮らし向き

大学進学に関わる暮らし向きについて、高校3年時と現在について尋ねた結果、高校時代と現在では大きく異なることはなく、「ふつう」(高校3年時55.6%、現在57.3%)と回答者した者が半数であり、「豊か」(高校3年時16.7%、現在14.2%)「やや豊か」(高校3年時11.6%、現在12.9%)と3割は豊かな暮らし向きである(図表6)。中学時代と高校時代の家庭の雰囲気は「暖かい雰囲気」(中学3年時55.3%、高校3年時58.0%)「どちらかという暖かい雰囲気だった」(中学3年時26.5%、高校3年時25.9%)を合計すると8割は暖かい家庭で育ったことがわかる(図表7)。

図表7 中3・高3時の家庭雰囲気 単位：%

	中3(N=275)	高3(N=274)
暖かい雰囲気だった	55.3	58.0
どちらかという暖かい雰囲気だった	26.5	25.9
どちらかという暖かい雰囲気ではなかった	12.0	9.5
暖かい雰囲気ではなかった	6.2	6.6

3) 進学前の成績と進学理由

進学に関わる成績は、中学3年時、高校3年時ともに「真ん中あたり」が最も多く、中学3年時は4割、高校3年時は3割が真ん中である。次いで、「上の方」「やや上の方」も中学・高校時代ともに3割である(図表8)。

現在通学する短大に進学した理由の一位は「資格をとりたかった」(41.0%)次いで「興味がある内容だった」(20.7%)「早く就職したかった」(14.0%)の順である。進学理由の二位も同様に「資格をとりたかった」(30.4%)次いで「興味がある内容だった」(16.0%)「早く就職したかった」(12.9%)の順である(図表9)。回答者は資格取得に興味を持ち、カリキュラムに興味を持っていることから、現在の資格志向を反映した結果であるといえる。また、「早く就職したかった」という回答から短大への進学が先行研究で指摘されるように経済的要因と関連が深いことも考えられる。

図表8 中3・高3時成績 単位：%

	中3 (N=276)	高3 (N=276)
上の方	3.6	9.1
やや上の方	26.9	25.2
真ん中のあたり	41.8	32.5
やや下の方	22.9	25.2
下の方	4.7	8.0

図表9 進学理由 単位：%

	1位 (N=271)	2位 (N=263)
資格を取りたかった	41.0	30.4
興味がある内容だから	20.7	16.0
早く就職したかった	14.0	12.9
成績が足りなかった	6.6	3.8
就職に有利	5.9	11.0
成績に合っていた	3.7	9.5
高校の先生に勧められて	2.6	5.7
家から近い	0.7	3.8
家族が卒業生	0.7	0.4
入学し易い	0.7	2.7
その他	3.3	3.8

4) 希望ライフコース

中学3年時、高校3年時、現在の3時点における希望ライフコースは年齢が高くなるにつれて、「仕事継続型」(「結婚せず仕事をずっと続ける」「結婚するが子どもを持たずに仕事をずっと続ける」「結婚し子どもを持ち、仕事をずっと続ける)(中3時34.9%、高3時29.5%、現在23.0%)は減少する傾向にある(図表10)。また、「退職型」も(中3時20.0%、高3時12.0%、現在11.5%)減少する傾向にある。一方、「再就職型」(「結婚や出産時に退職し、子育て後に再び仕事を持つ)は(中3時44.0%、高3時57.5%、現在63.7%)増加する傾向にある。

図表10 中3、高3、現在の将来展望 単位：% (9)

	中3時希望 (N=275)	高3時希望 (N=275)	現在希望 (N=276)
仕事継続	34.9	29.5	23.0
再就職	44.0	57.5	63.7
退職	20.0	12.0	11.5
その他	1.1	1.1	1.9

3. 進路展望と変数の設定

3.1 高校3年時の希望職業経歴と変数の設定

高校3年時の進路選択に与える影響について先行研究から指摘されてきた「家庭の経済状況」、「高校時代の成績」、「性別分業意識」、「母親の影響」と「進路展望」との関係について検

討する。

3.2 変数の設定

1) 家庭の経済状況

家庭の経済状況が女子学生の進路選択に影響を与えるという先行研究（尾嶋 2001など）の指摘を検証するため、「家庭の経済状況」を設定した。設問は高校3年の進路を決める際、「家庭の経済状況」はどの程度影響を与えたか（「最も影響が強い」「少しは影響がある」「あまり影響がない」「全く関係ない」）を設定した。

2) 高校時代の成績

高校時代の成績が進路選択に影響を与えるという先行研究を考慮して「高校時代の成績」（高校3年の進路を決める際、「自分の成績」はどの程度影響を与えたか「最も影響が強い」「少しは影響がある」「あまり影響がない」「全く関係ない」）を設定した。

3) 性別分業意識

女子学生は進路選択においてジェンダー意識などの影響を受けることが指摘されていたことから、「性別分業意識」（「男性の仕事は収入を得ること、女性の仕事は家庭の家族の面倒をみることだ」について「そう思う」「そう思わない」）を設定した。

4) 母親の影響

先行研究（本田 2008）から母親の子育て意識などが進路選択に影響を与えると考えられることから「母親の影響」（高校3年生の頃、お母様はあなたに「一生仕事を続けるように」とアドバイスをしていたか「あてはまる」「あてはまらない」）を設定した。

4. 分析結果

1) 進路展望と家庭の経済状況

高校時代の経済状況と進路展望との関係は有意な結果ではなかった（図表11）。そこで、高校3年時の暮らし向きとの関係についても分析を試みたが、有意な結果は得られなかった（図表12）。

図表11 進路展望と進路選択に与える影響との関係

		仕事継続	再就職	退職	
家庭の経済状況	影響あり(N=263)	31.1%	61.3%	7.6%	$\chi^2=3.89$ p=.14
自分の成績	影響あり(N=264)	30.2%	58.8%	11.1%	$\chi^2=.91$ p=6.35
男の仕事は収入得、女の仕事は家庭	思う(N=255)	28.4%	57.4%	14.2%	$\chi^2=3.16$ p=.21
母親から一生仕事を続けるように	あてはまる(N=245)	42.3%	51.5%	6.2%	$\chi^2=15.7$
アドバイス	あてはまらない(N=148)	20.3%	64.2%	15.5%	***

注) ***p<.001

図表12 進路展望と高3年時の暮らし向きとの関係

		仕事継続	再就職	退職	
豊か	(N=78)	26.9%	55.1%	17.9%	$\chi^2=8.12$
ふつう	(N=150)	30.7%	58.0%	11.3%	p=.23
貧しい	(N=40)	35.0%	62.5%	2.5%	
わからない	(N=4)	0.0%	75.0%	25.0%	

2) 進路展望と高校時代の成績

高校時代の成績と進路展望との関係も有意な結果ではなかった(図表11)。改めて高校3年時の成績と進路展望との関係について分析を行ったが、こちらも有意な結果は得られなかった(図表13)。

図表13 進路展望と高校3年時成績との関係

		仕事継続	再就職	退職	
上	(N=91)	31.9%	51.6%	16.5%	$\chi^2=4.81$
中	(N=88)	30.7%	62.5%	6.8%	p=.28
下	(N=91)	27.5%	59.3%	13.2%	

3) 進路展望と性別分業意識

性別分業意識と進路展望との関係も有意な結果ではなかった(図表11)。そこで改めて、家事意識(大学卒業後の生活のうち「家族のために家事に専念したい」について「あてはまる」「あてはまらない」と進路展望との関係について分析した結果は有意であった。再就職型や退職型は「家族のために家事に専念したい」に「あてはまる」と回答する割合が高く、仕事継続型は「あてはまらない」と回答する割合が高い(図表14)。

図表14 進路展望と家事意識

		仕事継続	再就職	退職	
あてはまらない(N=47)		44.7%	53.2%	2.1%	$\chi^2=8.27$
あてはまる(N=214)		27.6%	58.9%	13.6%	*

注) * p<.05

4) 進路展望と母親の影響

進路展望と母親の影響との関係は有意であった。仕事継続型は「一生仕事を続けるように」に「あてはまる」と回答した者が多く、再就職型と退職型は「あてはまらない」と回答した者が多い(図表11)。さらに、高校3年時の母親のライフコースへのアドバイスとの関係も有意であった。母親から高校3年生の時点で、継続型をアドバイスされていた学生は継続型を、再就職型をアドバイスされていた学生は再就職型を、退職型をアドバイスされていた学生は退職型を希望する傾向が高い(図表15)。

図表15 進路展望と母親アドバイス

	仕事継続	再就職	退職	
仕事継続 (N=70)	74.3%	21.4%	4.3%	$\chi^2=150.3$
再就職 (N=135)	6.7%	85.2%	8.1%	***
退職 (N=25)	20.0%	28.0%	52.0%	
その他 (N=36)	41.7%	50.0%	8.3%	

注) ***p<.001

5. まとめと考察

女子高校生の進路選択を支える基盤構造に男女の共通性が高まる傾向や資格志向が強まっていることが指摘されてきた。しかし、女子高校生の実際の進路やその後の将来展望などについては十分に検討されてきたとはいえない。

本研究では、高校生の進路選択が規定する要因を女子短大生を対象に検討した結果、高校3年の進路選択時には保育系短大への進学希望は資格取得やカリキュラムに興味があったことが明らかになった⁽¹⁰⁾。早く就職したかったという回答も多かったことから、短大進学に経済要因が影響していることも示唆しているものと思われる。

高校3年時の将来展望と進路選択との関係について経済的要因や成績は影響を与えていなかった。また、性別分業意識も高校3年時の将来展望には影響を与えていなかったものの、再就職型や退職型は家事に専念したいと思う割合が高く、仕事継続型は家事に専念したいと思う割合は低い結果であった。性別分業意識には否定的であるものの、家族のために家事には専念したいという意識が将来展望に影響を与えているものと思われる。将来展望に母親の意識は強く反映され、母親がアドバイスするライフコースと同様の傾向を示す結果であった。

先行研究(天野1986など)では女子であるがゆえに女子専用の軌道に従った進路選択や女子であるがゆえに進路選択を低く設定しているとの指摘も本研究の結果では見られなかった。また、本研究の対象者は短大生であることから成績原理や経済要因が進路選択に影響を与えているかどうか本研究の対象者の結果だけでは判断できない。ただし、保育士資格・幼稚園教諭免許は短大だけではなく、専門学校・大学など多くの高等教育機関で取得できる中、短大に進学したことを考えると、経済要因や成績原理は少なからず影響を与えているものと思われる⁽¹¹⁾。

市川(1995)は高等教育の変化について、量的指標と質的指標の両方の側面が捉えられと説明する⁽¹²⁾。進学率が上昇すると高等教育機関に入学する者が多様化し、教育の在り方そのものを変えると論じた。新たに高等教育に参入する学生の知識内容や興味関心、将来の目標や卒業後の進路などはエリート層のそれらとは異なるため、大学は新参入者らのニーズにも対応しようとし、カリキュラムや指導法を変容させていくことになる。こうして、大学はその機能を一部エリートのための教育からマスのための教育へとシフトさせる。この変化が生じるのは、同年齢人口の15%程度が高等教育機関に在学するようになる頃だといわれる。その後も進学率が上昇し50%を超えてユニバーサル段階になると、学生のさらなる多様化が進み、大学側もそれに応じて提供する教育を変えていくことになる。高等教育の量的な変化は単なる学生規模の増大にとどまらず、学生の多様化に対応するために、教育の質的な変容を伴うことになるという。従来の進路選択に関する研究だけでは多様な教育内容をもつ高等教育機関に応じた高校生の進路選択について理解することは難しいように思われる。

女子短大生の将来展望は再就職型が最も多く、次いで仕事継続型を希望する割合が高い傾向は中学・高校時代と大きな違いは見られないものの、仕事継続型が減少し再就職型が増加して

いた。女子学生の進路展望には母親が強く影響を与えているものの、年齢が上がるにつれて再就職型が増加する傾向や様々な進学先がある中、短大を選択した要因については十分に明らかにすることができなかった。高校時代の進路決定に与える要因をさらに検討することと、母親以外の進路展望に与える要因について検討することが今後の課題である。

<注>

- (1) 1961～70年代の拡大が、おもに私立女子短大の増設に起因し、小規模な大学において、従来通りの教養型の教育が行われたことと関係している。女子がそこで身につける「知識」の内容は、従来と変わらなかった(河野 2009)。
- (2) 1990年代以降女子の大学進学率が高まり、女子学生は社会科学と人文科学で増大し、家政学で減少した(河野 2009)。
- (3) この趨勢が続くとするならば教育アスピレーションや教育達成にみられたジェンダー・トラックは解消の方向に向かうことが予測されるという(片瀬 2005)。
- (4) 大学と専門学校への進学率は上昇し、専門学校への進学は全体の4分の1に近づき、大学につぐ高校生の進学先となった(塚原 2005)。専門学校は1975年の学校教育法の一部改正によって、「一条校」と称する正規の学校体系の枠外にあった各種学校の一部から昇格した専修学校のうち、高等学校卒業程度の者を対象とする課程である(陳 2003)。
- (5) 1994年には一定要件を満たす専門課程の修了者に限って「専門士」の称号が取得できるようになり、1998年には学校教育法等の一部改正で専修学校卒業者の大学への編入も認められ、短大を卒業して得られる「準学士」と制度上はほとんど差がないようになった。2005年には一定要件を満たす専門課程卒業者に高度専門士の称号を付与し、大学院入学資格を認める制度が創設された。(長尾 2005, 2008)。
- (6) 高校3年生を対象にした調査と同一高校生の卒業後2年目のパネル調査(長尾 2007)。
- (7) 簿記など汎用性の高い資格や教員免許・保育士などカリキュラム履修によって取得できるタイプの資格が多く、専門学校は医療系、短大は教育系の領域を中心に行っていること、短大では一般教養系の科目が多く、主に一般事務職に就く労働力を排出してきた(長尾 2007, 小方・金子 1997)。

西田は進路多様校の高校生を対象とした5回のパネル調査結果から専門学校への進学希望者は独自の「専門性」志向をもっていること、「職業的専門知識」形成カリキュラムをもたない普通科の高校生は職業と結びつくような知識・技能を求めて専門学校に進学するのではないかと推論している(西田 2009)。
- (8) 偏差値50(2012年Benesse偏差値区分参照)。創設100年の歴史があり、大学には家政学部と文学部を有し、文学部にも保育士・幼稚園教諭免許を取得できる専攻がある。東海地域から学生は通学し、幼稚園教諭免許2種と保育士資格が取得できる。調査は1年生と2年生に行い、合計275部(回収率91%)。
- (9) 中・高3年時の質問では仕事継続は「結婚せず仕事をずっと続ける」「結婚するが子どもを持たずに仕事をずっと続ける」「結婚し子どもを持ち、仕事をずっと続ける」、再就職は「結婚や出産時に退職し、子育て後に再び仕事を持つ」、退職は「仕事を持たない」である。学校卒業後の働き方に関する質問は、仕事継続は「就職し、結婚して子どもを持つが、仕事も続ける」、再就職は「就職し、結婚・出産を機に退職し、子育て後に再び仕事を持つ」退職は「就職し、結婚・出産を機に退職し、その後は仕事を持たない」「就職するが結婚し、仕事をしない」である。
- (10) ただし、進路展望と資格などとの関係の分析結果は有意ではなかった。
- (11) 学生たちに様々な進学先がある中で、短大進学を決定した理由をたずねると、「下に弟妹がいて経済的な負担があるから2年間の短大を選んだ」や「他の進路も考えたが成績と得意な内容などを考え合わせてこの大学に進学した」などの意見をよく聞くため、経済要因と成績要因もある程度影響があるものと思われる。
- (12) 市川(1995)によると、量的指標としてマーチン・トロウは学生数の増加、大学生の在学率の増大、個別大学の規模をあげ、質的指標として学生一人当たりの経費単価や教員/学生比率などが考えられるという。

<引用・参考文献>

- 天野正子編 1986, 『女子高等教育の座標』 垣内出版。
- 天野正子, 1988, 「『性と教育』研究の現代的課題—かくされた『領域』の持続」『社会学評論』Vol.39, 266-283頁。
- 荒牧草平 2002, 「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成—出身階層と価値志向の効果に注目して—」『教育社会学研究』第71集, 5-23頁。
- 陳 曦, 2003, 「専門学校の研究—高等教育機関としての役割」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』51集, 67-80頁。
- 藤村正司 2009, 「大学進学における所得格差と高等教育政策の可能性」『教育社会学研究』第85集, 27-48頁。
- 平尾桂子 2005, 「女性の学歴と再就職」『家族社会学研究』第17巻第1号, 34-43頁。
- 本田由紀 2008, 「『家庭教育』の隘路—子育てに強迫される母親たち」勁草書房。
- 市川昭午編 1995, 『大学大衆化の構造』玉川大学出版部。
- 片瀬一男 2005, 「教育アスピレーションの変容」片瀬一男著『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容—』, 東北大学出版部。
- 河野銀子 2009, 「女子高等教育の量的拡大と質的変容—1990年度以降の変化に注目して—」『山形大学紀要』第14巻第4号, 359-370頁。
- 韓 民, 1996, 『現代日本の専門学校—高等職業教育の意義と課題—』玉川大学出版部。
- 小林雅之 2007, 『進学格差』筑摩書房。
- 丸山文裕 1995, 「女子高等教育進学の構造」市川昭午編『大学大衆化の構造』玉川大学出版部
- 長尾由希子 2005, 「女子高校生にとっての短期高等教育と将来展望—専門学校進学者と短大進学者の比較から—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第45巻, 97-103頁。
- , 2007, 「短期高等教育と資格—女子に焦点をあてて—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻, 141-156頁。
- , 2008, 「専修学校の位置づけと進学者層の変化—中等後教育機関から高等教育機関へ—」『教育社会学研究』第83集, 85-106頁。
- , 2010, 「高等教育における専攻の男女差—実学志向の展開と支持層に注目して—」PROCEEDINGS 12, 81-90頁。
- 中西祐子 1998, 『ジェンダー・トラッカー—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学—』東洋館出版。
- 西田亜紀子 2009, 「専門学校は大学進学の代替的進路か?—進路多様校における専門学校希望者の分析による検討—」『子ども社会研究』15号, 163-178頁。
- 小方直幸 1994, 「短大卒女子の職業キャリアと短大教育の選択」『教育社会学研究』第54集, 107-125頁。
- 小方直幸, 金子元久 1997, 「『女子事務職』の形成と融解—短大卒を中心に—」『日本労働研究雑誌』No.45, 2-12頁。
- 尾嶋史章, 2001, 「進路選択はどのように変わったのか—16年間にみる進路選択意識の変化—」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代—』ミネルヴァ書房, 21-61頁。
- , 2002, 「社会階層と進路形成の変容—90年代の変化を考える—」『教育社会学研究』第70集, 125-142頁。
- 白川俊之 2011, 「現代高校生の教育期待とジェンダー—高校タイプと教育段階の相互作用を中心に—」『教育社会学研究』第89集, 49-69頁。
- 塚原修一 2005, 「専門学校の新たな展開と役割」『日本労働研究雑誌』No.542, 70-80頁。
- 潮木守一 2008, 「大学進学率上昇をもたらしたのは何なのか—計量分析と経験知の間で—」『教育社会学研究』第83集, 5-22頁。
- 安田雪 2002, 「働きたいでも働けない—就職希望者の『階層』」『論座』2002年10月号, 98-109頁。
- 谷田川ルミ 2010, 「子ども時代の経験が後年に及ぼす影響—大学生から見る勉学文化の連続性に注目して—」『子ども社会研究』16号, 45-48頁。
- 矢野真和・濱中淳子 2006, 「なぜ大学に進学しないのか」『教育社会学研究』第79集, 85-102頁。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C) 平成23年度-25年度）の成果の一部である。

